

# 非行少年の将来認知の特徴を踏まえた

## 保護観察における関与のあり方

### 研究代表者

千葉大学教育学部

羽間京子

### 共同研究者

法務省千葉保護観察所

田中健太郎

## 1 まえがき

我が国では、再犯率、すなわち検挙人員に占める再犯者<sup>注1</sup>の人員の比率が平成9年から、少年(未成年の男女。以下同じ。)の一般刑法犯検挙人員に占める再非行少年<sup>注2</sup>の人員の比率が、同年を底として翌年から、毎年上昇を続けている(法務総合研究所, 2012)。犯罪の少ない安全・安心な社会の実現のためには、再犯防止対策、特に、少年と若年犯罪者への対策が喫緊の課題となっている(法務総合研究所, 2011)。政府としても、犯罪対策閣僚会議が、平成24年7月20日に「再犯防止に向けた総合対策」を策定し、具体的な対策に乗り出

しはじめ、その一つとして、再犯の実態や対策の有効性等に関する総合的な調査研究の実施を掲げた。

非行少年に対する法的処遇<sup>注3</sup>のうち、とりわけ社会内処遇である保護観察<sup>注4</sup>では、再非行防止のための自立支援が求められる。そして、より適切な処遇のためには、処遇者である保護司と保護

---

<sup>注1</sup>再犯者とは、前に(道路交通法違反を除く)犯罪により検挙されたことがあり、再び検挙された者をいう。

<sup>注2</sup>再非行少年とは、前に、道路交通法違反を除く非行により検挙(補導)されたことがあり、再び検挙された少年をいう。

---

<sup>注3</sup>少年司法手続の目的は、「少年の健全な育成」(少年法第1条)である。保護処分として、(1)保護観察所の保護観察に付すること、(2)児童自立支援施設又は児童養護施設に送致すること、及び(3)少年院に送致することの3種類が規定されている(少年法第24条第1項)。なお、少年院での収容期間は、原則として20歳に達するまで(少年院法第11条)であるが、成績が良好であるときは、仮退院が許され、その場合は、少年院での収容期間が満了するまでの間、保護観察に付される(更生保護法第40条、第41条、第42条)。

<sup>注4</sup>保護観察とは、その対象となる者に対して、社会において、一定の指導や必要な援護をして、その改善更生を助けようとする制度である(更生保護法第1条、第49条)。

観察官が、保護観察を受けている少年（以下、「少年の保護観察対象者」ともいう。）の物事をとらえる特徴を踏まえることが肝要である。なかでも、少年の将来のとらえ方や希望（以下、「将来認知」という。）に着目し、十分に理解する必要性があるとの指摘がなされている（羽間，2012；羽間・廣部，2008）。

将来認知に関連して、かねてから国内外において「時間的展望（time perspective）」についての研究が積み重ねられてきた（e.g., 都筑, 1982; 白井, 1997; Teuscher & Mitchell, 2011）。時間的展望とは、そもそも、“個々の研究者が微妙なニュアンスの違いを含みながらこれに類似した用語を使ってきた”（都筑, 1999, p.6）とされるが、最も一般的な定義は、Lewin（1951）が示した、ある一定時点における個人の心理学的過去・現在・未来についての見解の総体という意味であり、“いわゆる‘みとおし’を指す”（白井, 1997, p.1）とされている。時間的展望の概念を最初に提唱した Frank（1939）によると、人間は経験を重ねることにより、過去の経験を踏まえて現在をとらえ、その後を予期できるようになるという。

我が国においては、白井（1997）が、時間的展望は次の4つの要素からなると整理している。すなわち、(a) 狭義の時間的展望（過去・現在・未来が事象によって分節化されるものにとらえたときの、その事象の広がりや数、相互の関係）、(b) 時間的態度（過去・現在・未来に対する感情的評価のこと。あるいは、将来または過去の事象に対する肯定的あるいは否定的評価の総体）、(c) 時間的指向性（過去・現在・未来の相互関係についての信念体系によるところの過去・現在・未来の重要性の順序づけ）、(d) 狭義の時間知覚（時間の流れる早さやその方向性、連続性などに関する評価や判断）の4要素である。

時間的展望の研究においては、非行少年の将来

認知に関するものもいくつかなされている。これまで、非行少年は、仕事が長続きせず、目標に向かって努力を続けることが困難であるとの指摘がされており、その背景要因として、少年の将来認知の問題が仮定されてきたためである（Shirai, 2000）。

日本では、まず、非行少年は、時間的展望が短い傾向にあるとの研究がある。たとえば、大橋・鈴木（1988）は、これからの人生で起こりうる大切な事柄を挙げさせた結果、挙げられた事柄の時期の範囲に関して、過去・未来のいずれにおいても非行少年がより狭いことが示されたとした。

また、非行少年は、より未来指向的であるとする研究が見られる（杉山・神田, 1991；石原・時田・渡部, 2005；西牧, 2003）。加えて、非行少年は楽観的で非現実的とするもの（石原・谷口・勝木・時田・横田, 2003）、未来指向的かつ楽観的であるという研究（Shirai, 2000）がなされてきた。このうち、Shirai（2000）は、時間的展望の体験的な側面を測定する「時間的展望体験尺度」（白井, 1994）を使用して、少年鑑別所に収容されている少年と、高校園芸科の生徒、高校普通科の生徒を対象にした質問紙調査を行った。その結果、非行少年は、希望と将来指向性においては他の二群よりも有意に高く、過去受容においては職業科群よりも有意に低い得点を示し、充実感には群間に統計的有意差が見られなかったことを明らかにした。

さらに、非行少年は、過去・現在・未来の時間的次元を不連続とする傾向があるとする研究結果（石原他, 2005）も示されてきた。

ただし、これらの研究は、教護院（現・児童自立支援施設）に在院中の少年を対象とした杉山・神田（1991）以外は、少年鑑別所に収容された少年を対象としたものである。

保護観察を受けている少年を対象とした時間

的展望や将来認知に関する実証研究は、小宮山・星・高橋・川田（1976）以外、ほとんど見られない。小宮山他（1976）は、将来認知を含めた生活意識に関する質問紙調査を行い、時間的展望について、非行少年は一般の少年に比べ、将来の具体的展望がより暗いにもかかわらず、全体的には明るく見るといった傾向があることを明らかにした。しかし、この研究は、1970年代のものであり、現在の少年の保護観察対象者も同様の特徴を有しているとは言い切れない。

そこで、本研究は、保護観察に付された少年を対象として、その将来認知の特徴を明らかにすることとした。さらに、本研究では、保護観察の処遇者を対象に、処遇者自身の将来認知や、処遇者が非行少年の将来認知をどのようにとらえているのか、自立支援のために、将来に向けた指導についてどのように考えているのかを明らかにすることにした。先述のように、より実効性のある保護観察処遇のためには、非行少年の将来認知の特徴を十分に踏まえた関与が必要だが、非行少年の処遇者を対象とした研究は、管見の限り見当たらないからである。

## 2 目的

本研究は以下の三点を目的としている。

まず、第一に、保護観察に付された少年を対象として、現在と将来に関する認知、とりわけ将来認知の特徴を明らかにし、また、これまで大人から受けた、将来に向けての指導を少年がどのようにとらえているのかを把握することである（調査1）。

ここで、本研究において、非行少年の時間的展望のうち、現在と将来の認知に焦点を当てている理由を改めて述べておきたい。

非行少年の更生の過程において、過去の非行や

体験にどう向き合っていくかが、重要なポイントとなるとの指摘がある（e.g., 藤岡, 2001）。保護観察処遇においても、保護観察官や保護司などの処遇者は、少年の現在と将来だけに焦点を当てているわけではない。そもそも、前述のように、時間的展望は、人の過去・現在・未来の総体であり、それぞれ、他の時間的次元と切り離せない。

しかしながら、研究のために、保護観察中の非行少年に、過去について尋ね、直面化させることは、少年にネガティブな影響を与える可能性が高い。なぜならば、非行少年は、被虐待体験を有する者が多く（法務総合研究所, 2001）、また、犯罪をした者が過去を振り返る作業は、支援者に受けとめられながらでないとうることができないからである（羽間, 2012；岡本, 2013）。

特に、社会内処遇である保護観察では、慎重さに欠ける性急な直面化は、非行少年を混乱させ、更なる行動化を招く危険性がある（羽間, 2009）。そこで、本研究では、これまで大人から受けてきた指導に関して以外は、敢えて過去に対する認知を取り上げないこととした。

本研究の第二の目的は、保護観察の処遇者を対象に、処遇者自身の将来認知、処遇者が非行少年の将来認知をどのようにとらえているか、将来に向けた指導をどのように考えているかなどを明らかにすることである（調査2）。

そして、本研究の最大の目的は、以上の研究結果を踏まえ、より効果的な保護観察処遇のあり方を考察することにある。

## 3 調査1

調査1では、非行少年の現在と将来に関する認知や、これまで大人から受けた指導に対するとらえ方を明らかにするために、非行少年（以下、「非行少年群」という。）と対照群である一般高校生（以

下、「一般学生群」という。)に、質問紙調査を実施した。

### 3.1 対象

非行少年群は、次の3点を満たす者を対象とした。

1. A 保護観察所長の保護観察下にある保護観察処分少年と少年院仮退院者。

2. 調査期間中に、保護観察開始時に保護観察所において保護観察官が必ず行う初回面接を、A 保護観察所において受けた少年。

3. 本調査の参加について十分な説明を受けた後、十分な理解の上、保護観察処分少年・少年院仮退院者自身とその保護者から、自由意思による文書同意が得られた者。

一般学生群は、A 県内の県立高等学校(普通科)3校に在学している2年生の生徒を対象とした。一般学生群について3校で調査を実施したのは、できる限り地域性等による偏りが生じないようにするためである。また、一般学生群を高校2年生の生徒としたのは、我が国の非行少年は、16歳か17歳が最も多く(法務総合研究所, 2012)、年齢層をできるだけ近似させるためである。

本調査の参加について十分な説明を受けた後、十分な理解の上、生徒本人とその保護者から自由意思による文書同意が得られた生徒を調査対象とした。

調査期間中、非行少年群は、105名の保護観察処分少年と少年院仮退院者がその対象となったが、そのうちの12名からインフォームド・コンセントが得られなかった。最終的な調査対象者は、保護観察処分少年65名(男子50名、女子15名。平均年齢17.5歳)、少年院仮退院者28名(男子26名、女子2名。平均年齢18.1歳)であった。一般学生群の最終的な調査対象者は、162名(男子110名、女子50名、不明2名、平均年齢16.8歳)だった。

### 3.2 方法

#### 3.2.1 手続

非行少年群は、2013年1月から同年8月までの期間に、保護観察の初回面接において、A 保護観察所保護観察官が、同所面接室内で個別に実施した。

一般学生群については、2013年2月から同年3月までの間に、在籍する高等学校のホームルーム等の機会に、各校の教員が一斉に実施した。

#### 3.2.2 倫理的配慮

前述の通り、調査の参加について、非行少年群と一般学生群のいずれにおいても、本人と保護者のインフォームド・コンセントを得た。

調査にあたっては、秘匿性確保のため、無記名とし、封筒を調査対象者本人に配布して、本人が記入後の質問紙を封筒に封印したものを回収した。

本調査は、千葉大学教育学部生命倫理審査委員会の承認を受けて実施した。さらに、非行少年群への質問紙調査の実施については、A 保護観察所所長から許可を受けた。A 県内の県立高等学校3校における質問紙調査の実施については、A 県教育委員会と3校の県立高等学校長の許可を得た。

#### 3.2.3 質問紙の構成

本研究では、2種類の質問紙を使用した。

##### (1) 質問紙1

質問紙1として、白井(1994)の時間的展望体験尺度を改変した。時間的展望体験尺度は、具体的には、希望・将来指向性・現在の充実感・過去受容の4つの下位尺度からなり、5件法で回答を求めるものである。本研究では、このうち、過去受容の項目を削除した。前述の通り、本研究は、過去については敢えて取り上げないこととしているためである。実際に、時間的展望体験尺度を用いた予備調査を、大学生および大学院生の4名と、保護観察官等非行臨床の専門家の2名に対して行ったところ、過去受容の項目(たとえば、「自分の過去は辛いことばかりだった。」など)は、少年に

過去の被害体験を想起させる可能性があり、保護観察の初回面接で実施することには慎重にならざるを得ないとの指摘がなされた。

また、この予備調査の結果を踏まえ、他の下位尺度に関する項目についても、表現をより分かりやすいものに改変した。さらに、質問紙1の最後の項目が、ポジティブな内容の質問で終わるように、質問の順序を一部変更した。

最終的な項目は、希望・将来指向性・充実感についての13項目であり、それぞれ、「5:あてはまる」から「1:あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

## (2) 質問紙2

質問紙2として、現在と将来に関する設問とともに、これまで大人から受けてきた、将来に向けての指導を、調査対象者がどのように受けとめていたかに関する質問項目を作成した。

第一に、前述のように、非行少年の将来認知に関する先行研究では、その時間的展望の長さが短い傾向にあるとされている。そこで、将来認知に関する5つの質問項目を設定した。

まず、調査対象者が「将来」という言葉を使うときにどれくらい先のことを考えているのかについて、「2~3日先までのこと」「1か月先までのこと」「1年先までのこと」「5年先までのこと」「6年以上先のこと」の5件法の順序尺度によって回答を求めた(問1)。

また、先行研究において、非行少年は時間的次元を不連続とする傾向があるとの指摘がなされていることから、現在の行動(具体的には我慢や努力)が将来につながりうると考えているかどうかをとらえるために、2つの質問項目(問2:「あなたは、『がんばったら、いつかは、よいことがある』と思いますか。」と問3:「あなたは、『何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある』と思いますか。」)を作成し、「5:非常にそう思う」

から「1:まったくそう思わない」の5件法で回答を求めることとした。

さらに、先行研究では非行少年が将来を楽観的にとらえる傾向があるとされているため、将来への楽観的な認知に関する質問を1つ設定した(問4:「あなたは、『楽しいことは、長く続くことがある』と思いますか。」)。また、将来への希望に関する質問を1つ設けた(問5:「あなたは、『いやなことが続いていても、いつかは、いいことが起こる』と思いますか。」)。それぞれについて、「5:非常にそう思う」から「1:まったくそう思わない」の5件法で回答を求めた。

第二に、少年の保護観察対象者に対する処遇に資するために、調査対象者が大人からこれまで受けてきた、将来に向けての指導をどのように受けとめていたかということに関する7つの質問項目を作成した。そして、調査対象者が中学校時代に「いい先生だ」と思っていた教員(思い浮かばないときは、中学校時代に嫌いではなかった教員)を具体的に想起して回答するように教示することとした。

ここで、たとえば、非行少年群であれば保護観察の処遇者による指導、一般高校生群であれば現在在籍している高校の教員からの指導について、それぞれ回答を求めることも考えられる。しかしながら、非行少年群は、多くの場合、初回面接時で初めて保護観察官と会い、保護司とは保護観察官との初回面接後に面接するため、質問自体が成り立たない。また、一般学生群について現在在籍している高校の教員からの指導に関する回答を求めることは、教育上、悪影響を及ぼす可能性がないとは言えない。一方、義務教育である中学校時代の教員の指導であれば、両群ともに、ほぼ必ず経験している。また、調査対象者にとって、中学校時代は比較的近い過去であって、実際の指導場面などを想起しやすいと考えられる。そこで、本

研究では、中学校時代の特定の教員を念頭に置いて、その教員からの指導について回答してもらうこととしたものである。また、教員からの指導に対する生徒の受けとめは、その教員と生徒の関係性にも左右される。そこで、本研究では、関係が良かった（あるいは悪くなかった）教員を想起してもらうこととした。

具体的な質問項目としては、問1に対応させる目的で、当該教員が「将来」という言葉を使ったときに、調査対象者が、その教員がどれくらい先のことを考えていると受けとめていたのかを尋ねることとした（問6）。回答は、問1と同様、「2～3日先までのこと」から「6年以上先のこと」の5件法の順序尺度で求めることとした。

次に、保護観察官等非行臨床の専門家2名と教員経験者1名を対象に、将来に向けての指導をする際に、よく用いてきた言葉を尋ねたところ、「がんばれ」、「ガマンしなさい」、「人に迷惑をかけないようにしなさい」、「あなたのためだから」の4つの言葉が頻繁に用いられており、とりわけ「がんばれ」や「ガマンしなさい」は、多く使用されているとの結果が得られた。そこで、特に、最も頻繁に用いられている可能性が高い「がんばれ」や「ガマンしなさい」という教員の言葉について、調査対象者が、当該教員の指導は生徒の将来に向けてのものだと考えていたかどうかを検討することとした。具体的には、「その先生に『がんばれ』と言われたとき、先生は『がんばれば、いつかは、あなたによいことがある』と考えていたと思いませんか。」（問7）と「その先生になにかをガマンするようにと言われたとき、先生は『ガマンすれば、いつかは、あなたによいことがある』と考えていたと思いませんか。」（問8）という2つの質問項目を設けた。それぞれ、「5：非常にそう思う」から「1：まったくそう思わない」の5件法で回答を求めた。

加えて、上記の「がんばれ」、「ガマンしなさい」、「人に迷惑をかけないようにしなさい」、「あなたのためだから」の4つの指導について、当該教員からそのような言葉を聞いたときの調査対象者の気持ちに関して、それぞれ「5：とてもよい気持ちになった」から「1：とてもいやな気持ちになった」までの5件法で回答を求めた（問9ないし問12）。

なお、これら4つの指導のうち、「あなたのためだから」という言葉は、他の3つに比べ、自分のことを思ってくれている発言とも、婉曲的な説得とも受けとれる、やや多義的な言葉と考えられた。

以上の全12項目について、保護観察官等非行臨床の専門家2名と心理学者1名の協力を得て、表現などに問題がないことを確認した。

### 3.2.4 分析方法

分析にあたっては、非行少年は男子と女子とでその性質が大きく異なることから、男子と女子とで分けて行うこととした。具体的には、男子非行少年と女子非行少年とでは、そもそもの人数に大きな差があるうえ、保護処分を受ける理由となった違法行為（以下、「本件非行」という。）の種類に違いがある。たとえば、法務総合研究所（2012）によれば、2011年の保護観察開始時の少年院仮退院者は、男子が3,256人で女子は333人である。また、女子の本件非行の21.9%が覚せい剤取締法違反である一方で、男子では本件非行の主な種類に覚せい剤取締法違反が含まれていない。末永・田島・井部・渡部・山口・濱井（2001）は、少年鑑別所に収容された少年（男子1,641名と女子243名）への質問紙調査を行い、男女で、価値観や規範意識等に統計的に有意な差がみられたことを明らかにしている。

以上から、非行少年に関しては、男子非行少年と女子非行少年の分析は別々に行う必要があると言える。ただし、本研究においては、調査期間中に、女子非行少年の回答者数が解析可能な数に達

しなかったため、男子の回答のみを解析することとした。

回答結果の統計解析は、SPSS 21.0Jを使用した。有意水準は5%とした。

### 3.3 結果

#### 3.3.1 最終分析対象者

最終的な分析対象は、非行少年群は男子76名(平均年齢:17.7歳, SD:1.60)、一般学生群は男子110名(平均年齢:16.9歳, SD:0.35)だった。

二群を独立変数、年齢を従属変数とした一元配置の分散分析を行った結果、 $F(1, 184) = 26.55, p < .001$ であり、群間に有意な差が認められた。

#### 3.3.2 質問紙1の結果

##### (1) 主成分分析の結果

質問紙1について、まず、主成分分析を実施した。その結果、3つの主成分が抽出された。主成分分析の結果をTable 1に示す。13項目の全分散のうち、3つの主成分で説明される割合は、62.07%

Table 1  
主成分分析の結果(質問紙1)

| 質問項目                        | M    | (SD) | 成分     |        |        |
|-----------------------------|------|------|--------|--------|--------|
|                             |      |      | 1      | 2      | 3      |
| 5. 私には、だいたいの将来計画がある。        | 3.57 | 1.09 | .76    | -.28   | .44    |
| 13. 私の将来には、希望がもてる。          | 3.40 | 1.04 | .75    | -.02   | -.04   |
| 6. 私には、将来の目標がある。            | 3.86 | 1.12 | .74    | -.21   | .43    |
| 7. 私の将来は、ぼんやりとして、つかみどころがない。 | 2.83 | 1.25 | -.73   | .01    | .04    |
| 10. 私には未来がないように感じる時がある。     | 2.62 | 1.31 | -.66   | -.13   | .38    |
| 12. 将来のことはあまり考えたくない。        | 2.46 | 1.25 | -.63   | .04    | .35    |
| 4. 毎日がなんとなく過ぎていく。           | 3.36 | 1.22 | -.61   | -.30   | .23    |
| 8. 将来のためを考えて今から準備していることがある。 | 3.28 | 1.17 | .60    | -.30   | .50    |
| 11. 自分の将来は自分でできりひらく自信がある。   | 3.52 | 1.10 | .60    | -.06   | -.28   |
| 2. 毎日が同じことのくり返しで退屈だ。        | 3.05 | 1.31 | -.57   | -.47   | .21    |
| 9. 10年後、私はどうなっているのかよくわからない。 | 3.74 | 1.18 | -.57   | .34    | .19    |
| 3. 今の生活に満足している。             | 3.51 | 1.04 | .17    | .79    | .26    |
| 1. 毎日の生活が充実している。            | 3.93 | 0.92 | .19    | .79    | .36    |
| 寄与率                         |      |      | 37.47% | 14.57% | 10.03% |
| 累積寄与率                       |      |      | 37.47% | 52.04% | 62.07% |

(注) 質問項目の番号は、質問紙の順番を示す。

であった。

第1主成分は、将来指向性や将来希望を示す内容を広く含んでいることから、「将来指向性・希望総合点」と命名した。第2主成分は、現在の生活に対する満足度や充実度に関する内容であり、「現在の生活充実度」とした。第3主成分は、将来の目標や計画に関するものであり、「将来目標・計画」と名付けた。

**(2) 非行少年群と一般学生群の比較**

非行少年群と一般学生群の差を検討するために、

各主成分得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、第1主成分（将来指向性・希望総合点）については、非行少年群のほうが一般学生群よりも有意に高い得点を示した（ $F(1,181) = 12.24, p < .01$ ）。第3主成分（将来目標・計画）については、一般学生群のほうが非行少年群よりも有意に高い得点を示した（ $F(1,181) = 4.62, p < .05$ ）。第2主成分（現在の生活充実度）については、両群の得点到統計的有意差は見られなかった（Table 2）。

**Table 2**  
**各主成分得点の非行少年群と一般学生群の比較**

|       | 非行少年群 ( $n = 75$ ) | 一般学生群 ( $n = 108$ ) | F 値     |
|-------|--------------------|---------------------|---------|
|       | M (SD)             | M (SD)              |         |
| 第1主成分 | 0.30 (1.05)        | -0.21 (0.91)        | 12.24** |
| 第2主成分 | -0.05 (1.12)       | 0.03 (0.91)         | 0.26    |
| 第3主成分 | -0.19 (0.94)       | 0.13 (1.02)         | 4.62*   |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

**(3) 保護観察処分少年群と少年院仮退院者群の比較**

非行少年群を、保護観察処分少年群と少年院仮退院者群に分けて、各主成分得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、第1主成分（将来指向性・希望総合点）については、少

少年院仮退院者群のほうが保護観察処分少年群よりも有意に高い得点を示した（ $F(1,73) = 6.60, p < .05$ ）。第2主成分（現在の生活充実度）と第3主成分（将来目標・計画）については、両群の得点到統計的有意差は見られなかった（Table 3）。

**Table 3**  
**各主成分得点の保護観察処分少年群と少年院仮退院者群の比較**

|       | 保護観察処分少年群 ( $n = 50$ ) | 少年院仮退院者群 ( $n = 25$ ) | F 値   |
|-------|------------------------|-----------------------|-------|
|       | M (SD)                 | M (SD)                |       |
| 第1主成分 | 0.09 (1.06)            | 0.73 (0.91)           | 6.60* |
| 第2主成分 | 0.04 (1.23)            | -0.21 (0.86)          | 0.84  |
| 第3主成分 | -0.08 (1.03)           | -0.41 (0.70)          | 2.03  |

\*  $p < .05$

### 3.3.3 質問紙2の結果

#### (1) 非行少年群と一般学生群の比較

まず、順序尺度である問1と問6について、Wilcoxonの順位和検定を行った。なお、以下、質問項目ごとに所定の趣旨にかなった回答を得られなかったものは欠損値とした。

問1（「あなたが、『将来』ということばを使うときには、どれくらい先のことを考えていることが多いですか」）については、非行少年群（ $n=75$ ）のほうが一般学生群（ $n=107$ ）よりも、有意により遠い先のことを考えていることが示された（ $z=-$

$-2.33, p < .05$ ）。中学校時代にいい先生だと思っていた教員について尋ねる問6（「その先生が『将来』ということばを使ったとき、先生は、どれくらい先のことを言っていたと思いますか。」）については、非行少年群（ $n=74$ ）と一般学生群（ $n=106$ ）の間に有意差は見られなかった。

次に、問1と問6以外の10項目の平均値と標準偏差を算出した（Table 4）。

問2に天井効果が見られた。回答結果の比較は、ノンパラメトリック検定によって行った。

まず、非行少年群と一般学生群の各項目への回

Table 4  
質問紙2の10項目(問1と問6を除く)の平均値とSD

| 質問項目  | <i>n</i> | <i>M</i> | ( <i>SD</i> ) |
|---|----------|----------|---------------|
| 問2. あなたは、「がんばったら、いつかは、よいことがある」と思いますか。                                 | 183      | 4.03     | (1.10)        |
| 問3. あなたは、「何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある」と思いますか。                              | 184      | 3.79     | (1.15)        |
| 問4. あなたは、「楽しいことは、長く続くことがある」と思いますか。                                    | 184      | 3.07     | (1.22)        |
| 問5. あなたは、「いやなことが続いていても、いつかは、いいことが起こる」と思いますか。                          | 182      | 3.80     | (1.11)        |
| 問7. その先生に「がんばれ」と言われたとき、先生は「がんばれば、いつかは、あなたによいことがある」と考えていたと思いますか。       | 181      | 3.95     | (0.93)        |
| 問8. その先生になにかをガマンするようと言われたとき、先生は「ガマンすれば、いつかは、あなたによいことがある」と考えていたと思いますか。 | 179      | 3.73     | (0.89)        |
| 問9. あなたは、その先生から「がんばれ」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                            | 180      | 4.04     | (0.80)        |
| 問10. あなたは、その先生から「ガマンしなさい」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                        | 178      | 3.04     | (0.74)        |
| 問11. あなたは、その先生から「人に迷惑をかけないようにしなさい」と言われると、どんな気持ちになりましたか。               | 178      | 3.24     | (0.78)        |
| 問12. あなたは、その先生から「あなたのためだから」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                      | 178      | 3.34     | (0.96)        |

答結果を比較するために、項目ごとに Wilcoxon の順位和検定を行った (Table 5)。

その結果、現在の行動 (具体的には我慢や努力) が将来につながりうると考えているかどうかを尋ねる 2 つの質問項目、すなわち、問 2 (「あなたは、『がんばったら、いつかは、よいことがある』と思いますか。」) と、問 3 (「あなたは、『何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある』と思いますか。」) について、非行少年群のほうが一般学生群よりも有意に高い得点を示した (それぞれ、 $z = -2.33$ ,  $p < .05$  と  $z = -2.50$ ,  $p < .05$ )。

また、中学校時代にいい先生だと思っていた教員の指導についての 6 つの質問のうち、問 8 (「その先生になにかをガマンするようになると言われたとき、先生は『ガマンすれば、いつかは、あなたによいことがある』と考えていたと思いますか。」) について、非行少年群のほうが一般学生群よりも有意に高い得点を示した ( $z = -3.14$ ,  $p < .01$ )。

続いて、質問項目のなかで、対応のある項目 (問 2 と問 3, 問 4 と問 5, 問 7 と問 8) への回答結果の差を比較するために、それぞれ Wilcoxon の符号付順位検定を行った。

その結果、問 2 (「あなたは、『がんばったら、いつかは、よいことがある』と思いますか。」) と問 3 (「あなたは、『何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある』と思いますか。」) への回答結果に有意差が認められ、問 2 への回答のほうが高かった ( $z = -3.58$ ,  $p < .001$ )。

問 4 (「あなたは、『楽しいことは、長く続くことがある』と思いますか。」) と問 5 (「あなたは、『いやなことが続いていても、いつかは、いいことが起こる』と思いますか。」) の回答結果に有意差が認められ、問 5 への回

答のほうが高かった。 ( $z = -6.38$ ,  $p < .001$ )。

問 7 (「その先生に『がんばれ』と言われたとき、先生は『がんばれば、いつかは、あなたによいことがある』と考えていたと思いますか。」) と問 8 (「その先生になにかをガマンするようになると言われたとき、先生は『ガマンすれば、いつかは、あなたによいことがある』と考えていたと思いますか。」) への回答結果に有意差が認められ、問 7 への回答のほうが高かった ( $z = -4.02$ ,  $p < .001$ )。

加えて、次に挙げる項目への回答結果については、Friedman 検定を行った。すなわち、中学校時代にいい先生だと思っていた教員からの指導に対する気持ちを尋ねる問 9 (「がんばれ」), 問 10 (「ガマンしなさい」), 問 11 (「人に迷惑をかけないようにしなさい」), 問 12 (「あなたのためだから」) である。

問 9, 問 10, 問 11, 問 12 への回答結果について Friedman 検定を行った結果、これらの回答結果に有意差が見られた ( $\chi^2 (3) = 203.42$ ,  $p < .001$ )。そこで、Wilcoxon の符号付順位検定を用いた多重比較 (Bonferroni, 5%水準) を行った。その結果は、次の通りである。

1. 問 9 (「がんばれ」) と問 10 (「ガマンしなさい」) の回答結果に有意差が認められ、問 9 の回答のほうが高かった ( $z = -9.83$ )。

2. 問 9 (「がんばれ」) と問 11 (「人に迷惑をかけないようにしなさい」) の回答結果に有意差が認められ、問 9 への回答のほうが高かった ( $z = -8.54$ )。

3. 問 9 (「がんばれ」) と問 12 (「あなたのためだから」) の回答結果に有意差が認められ、問 9 への回答のほうが高かった ( $z = -8.20$ )。

4. 問 10 (「ガマンしなさい」) と問 11 (「人

Table 5

## 質問紙 2 の 10 項目（問 1 と問 6 を除く）の非行少年群・一般学生群の回答結果の比較

| 質問項目  | 非行少年群    |                           |                              | 一般学生群    |                           |                              | z 値     |
|---|----------|---------------------------|------------------------------|----------|---------------------------|------------------------------|---------|
|   | <i>n</i> | <i>M</i><br>( <i>SD</i> ) | <i>Mdn</i><br>( <i>IQR</i> ) | <i>n</i> | <i>M</i><br>( <i>SD</i> ) | <i>Mdn</i><br>( <i>IQR</i> ) |         |
| 問 2. あなたは、「がんばったら、いつかは、よいことがある」と思いますか。                                  | 76       | 4.24<br>(0.99)            | 4<br>(4-5)                   | 107      | 3.89<br>(1.15)            | 4<br>(4-5)                   | -2.33*  |
| 問 3. あなたは、「何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある」と思いますか。                               | 76       | 4.01<br>(1.08)            | 4<br>(4-5)                   | 108      | 3.64<br>(1.17)            | 4<br>(3-4)                   | -2.50*  |
| 問 4. あなたは、「楽しいことは、長く続くことがある」と思いますか。                                     | 76       | 3.14<br>(1.21)            | 3<br>(2-4)                   | 108      | 3.02<br>(1.24)            | 3<br>(2-4)                   | -0.68   |
| 問 5. あなたは、「いやなことが続いていても、いつかは、いいことが起こる」と思いますか。                           | 76       | 3.92<br>(1.07)            | 4<br>(3.25<br>-5)            | 106      | 3.71<br>(1.13)            | 4<br>(3-5)                   | -1.34   |
| 問 7. その先生に「がんばれ」と言われたとき、先生は「がんばれば、いつかは、あなたによいことがある」と考えていたと思いますか。        | 75       | 4.03<br>(0.94)            | 4<br>(3-5)                   | 106      | 3.90<br>(0.91)            | 4<br>(3-5)                   | -1.06   |
| 問 8. その先生になにかをガマンするようにと言われたとき、先生は「ガマンすれば、いつかは、あなたによいことがある」と考えていたと思いますか。 | 73       | 3.96<br>(0.92)            | 4<br>(3-5)                   | 106      | 3.57<br>(0.83)            | 4<br>(3-4)                   | -3.14** |
| 問 9. あなたは、その先生から「がんばれ」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                             | 74       | 4.15<br>(0.82)            | 4<br>(4-5)                   | 106      | 3.97<br>(0.79)            | 4<br>(3-5)                   | -1.70   |
| 問 10. あなたは、その先生から「ガマンしなさい」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                         | 73       | 2.95<br>(0.86)            | 3<br>(2-3)                   | 105      | 3.11<br>(0.64)            | 3<br>(3-3)                   | -1.94   |
| 問 11. あなたは、その先生から「人に迷惑をかけないようにしなさい」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                | 73       | 3.14<br>(0.87)            | 3<br>(3-4)                   | 105      | 3.31<br>(0.70)            | 3<br>(3-4)                   | -1.58   |
| 問 12. あなたは、その先生から「あなたのためだから」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                       | 73       | 3.42<br>(1.07)            | 3<br>(3-4)                   | 105      | 3.29<br>(0.87)            | 3<br>(3-4)                   | -1.07   |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

Table 6

## 質問紙2の10項目（問1と問6を除く）の保護観察処分少年群・少年院仮退院者群の回答結果の比較

| 質問項目   | 保護観察処分少年群 |                |               | 少年院仮退院者群 |                |                  | z 値     |
|--|-----------|----------------|---------------|----------|----------------|------------------|---------|
|  | n         | M<br>(SD)      | Mdn<br>(IQR)  | n        | M<br>(SD)      | Mdn<br>(IQR)     |         |
| 問 2. あなたは、「がんばったら、いつかは、よいことがある」と思いますか。                                 | 50        | 4.02<br>(1.12) | 4<br>(4-5)    | 26       | 4.65<br>(0.49) | 5<br>(4-5)       | -2.63** |
| 問 3. あなたは、「何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある」と思いますか。                              | 50        | 3.78<br>(1.17) | 4<br>(4-4.25) | 26       | 4.46<br>(0.71) | 5<br>(4-5)       | -2.89** |
| 問 4. あなたは、「楽しいことは、長く続くことがある」と思いますか。                                    | 50        | 3.08<br>(1.16) | 3<br>(2-4)    | 26       | 3.27<br>(1.31) | 3<br>(2-5)       | -0.56   |
| 問 5. あなたは、「いやなことが続いていても、いつかは、いいことが起こる」と思いますか。                          | 50        | 3.74<br>(1.14) | 4<br>(3-5)    | 26       | 4.27<br>(0.83) | 4<br>(4-5)       | -2.00*  |
| 問 7. その先生に「がんばれ」と言われたとき、先生は「がんばれば、いつかは、あなたによいことがある」と考えていたと思いますか。       | 49        | 4.00<br>(1.02) | 4<br>(3-5)    | 26       | 4.08<br>(0.80) | 4<br>(3-5)       | -0.02   |
| 問 8. その先生になにかをガマンするようと言われたとき、先生は「ガマンすれば、いつかは、あなたによいことがある」と考えていたと思いますか。 | 49        | 3.90<br>(0.98) | 4<br>(3-5)    | 24       | 4.08<br>(0.78) | 4<br>(3.25-5)    | -0.57   |
| 問 9. あなたは、その先生から「がんばれ」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                            | 49        | 4.08<br>(0.89) | 4<br>(4-5)    | 25       | 4.28<br>(0.68) | 4<br>(4-5)       | -0.77   |
| 問 10. あなたは、その先生から「ガマンしなさい」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                        | 49        | 2.86<br>(0.82) | 3<br>(2-3)    | 24       | 3.13<br>(0.95) | 3<br>(2.25-3.75) | -0.95   |
| 問 11. あなたは、その先生から「人に迷惑をかけないようにしなさい」と言われると、どんな気持ちになりましたか。               | 49        | 3.14<br>(0.82) | 3<br>(3-4)    | 24       | 3.13<br>(0.99) | 3<br>(2.25-3)    | -0.72   |
| 問 12. あなたは、その先生から「あなたのためだから」と言われると、どんな気持ちになりましたか。                      | 49        | 3.35<br>(1.11) | 3<br>(3-4)    | 24       | 3.58<br>(0.97) | 4<br>(3-4)       | -0.97   |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

に迷惑をかけないようにしなさい)の回答結果に有意差が認められ、問 11 への回答のほうが高かった ( $z = -3.11$ )。

5. 問 10 (「ガマンしなさい」と問 12 (「あなたのためだから」)の回答結果に有意差が認められ、問 12 への回答のほうが高かった ( $z = -4.00$ )。

6. 問 11 (「人に迷惑をかけないようにしなさい」と問 12 (「あなたのためだから」)の回答については、統計的有意差は見られなかった。

## (2) 保護観察処分少年群と少年院仮退院者群の比較

非行少年群を保護観察処分少年群と少年院仮退院者群に分け、各項目への回答結果の比較を行った。まず、順序尺度である問 1 と問 6 について、Wilcoxon の順位和検定を行ったところ、有意な差は認められなかった。次に、これら 2 つの質問を除いた 10 項目について、平均値と標準偏差を算出した。回答結果の比較のために、項目ごとに Wilcoxon の順位和検定を行った (Table 6)。

分析の結果、現在の行動 (具体的には我慢や努力) が将来につながりうると考えているかどうかを尋ねる問 2 (「あなたは、『がんばったら、いつかは、よいことがある』と思いますか。」) と、問 3 (「あなたは、『何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある』と思いますか。」) について、少年院仮退院者群のほうが保護観察処分少年群よりも、有意に高い得点を示した (それぞれ、 $z = -2.63$ ,  $p < .01$  と  $z = -2.89$ ,  $p < .01$ )。

さらに、将来への希望に関する質問である問 5 (「あなたは、『いやなことが続いても、いつかは、いいことが起こる』と思いますか。」) について、少年院仮退院者群のほうが保護観察所処分少年群よりも、有意に高い得点を示した ( $z = -2.00$ ,  $p < .05$ )。

## 3.4 考察

### 3.4.1 非行少年群の将来認知の特徴について

### (1) 非行少年群の将来指向性・希望と将来目標・計画のギャップについて

質問紙 1 の分析の結果、第 1 主成分 (将来指向性・希望総合点) について非行少年群のほうが一般学生群よりも有意に高い得点を示し、第 3 主成分 (将来目標・計画) について一般学生群のほうが非行少年群よりも有意に高い得点を示した。また、質問紙 2 の問 1 (「あなたが、『将来』ということばを使うときには、どれくらい先のことを考えていることが多いですか) について、非行少年群のほうが一般学生群よりも、有意により遠い先のことを考えていることが示された。この結果は、非行少年の将来展望の短さを示した、前掲の先行研究とは異なるものである。

なお、先述のように、Shirai (2000) は、時間的展望体験尺度を使用して、非行少年群のほうが対照群よりも、希望と将来指向性が有意に高い得点を示し、充実感には群間に統計的有意差が見られなかったことを明らかにしている。本研究においても、非行少年群は将来指向性・希望がより高く、現在の生活充実度には群間に有意差が見られておらず、本研究は、Shirai (2000) の上記の結果を支持するものと言える。これに加えて、本研究では、非行少年群は、将来目標・計画がより乏しく、高い将来指向性・希望とのギャップがあることが明らかとなった。

### (2) 非行少年群の将来指向性の高さについて

ここで、非行少年群の将来指向性の高さについて検討する。保護観察処分少年と少年院仮退院者は、保護観察の初回面接に至るまでの少年司法手続の過程で、本件非行の事実関係の真偽や本件非行に対する考え、生活歴等について問われるとともに、将来の生活設計に関する質問を何度も受けることが通例である。このように、非行少年群は、保護観察に付されるまでの間、将来について考える機会が非常に多い。

一方、一般学生群では、非行少年のように、短期間に連続して将来について問われることは稀であろう。そのため、非行少年群は、一般学生群よりも、将来に、より意識が向いている部分があるのではないだろうか。特に、非行少年群のうち、保護観察処分少年群と少年院仮退院者群の比較から、少年院仮退院者群のほうが、第1主成分の得点が高かった。少年院仮退院者群は、少年院で将来に向けての教育を受けており、そのため、彼らのほうが、将来への意識がより培われている結果が現れていると理解してよいだろう。

さらに、非行少年群は、保護観察処分少年は家庭裁判所における審判を受けて間もなく、少年院仮退院者は社会に出た直後である。このような状況を踏まえると、非行少年群は、今後の生活への不安を覚えやすいのではないだろうか。こうした先行きへの不安感が、非行少年群の視点を、将来に、より向かいやすくしている側面もあるのかもしれない。

### (3) 非行少年群の将来への希望の高さについて

質問紙1の分析から得られた第1主成分が、将来指向性・希望総合点と命名されたように、本研究における非行少年群の将来指向性は、より高い希望を伴っていることについて検討する。先述の通り、先行研究では、非行少年が未来志向であり、かつ、楽観的であるとの指摘がなされているが(e.g., 石原他, 2003), 本研究の結果も、非行少年の楽観性を示しているのであろうか。以下、質問紙2の分析結果を踏まえて考察する。

質問紙2の問2(「あなたは、『がんばったら、いつかは、よいことがある』と思いますか。’)及び問3(「あなたは、『何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある』と思いますか。’)への回答結果は、いずれも、非行少年群のほうが一般学生群より有意に得点が高かった。

一方、問4(「あなたは、『楽しいことは、長く

続くことがある』と思いますか。’)及び問5(「あなたは、『いやなことが続いても、いつかは、いいことが起こる』と思いますか。’)への回答結果については、非行少年群と一般少年群では、統計的有意差が認められなかった。さらに、問4と問5への被調査者全体の回答を、Wilcoxonの符号付順位検定で分析した結果、回答に有意差が認められ、問5への回答のほうが高かった。

上記の問2と問3の群間比較結果は、非行少年群のほうが、現在の行動(努力や我慢)が将来につながりうると考えていることを示している。また、問4と問5の群間比較の結果は、非行少年群のほうが、より楽観的な将来のとらえ方をしているとのものではなかった。さらに、調査対象者全体が、楽観的な将来希望(問4)より、より前向きな将来への希望(問5)を有していることが示された。

加えて、問2と問3に関する保護観察処分少年群と少年院仮退院者群の比較分析の結果、少年院仮退院者群のほうが、保護観察処分少年群よりも、それぞれ有意に高い得点を示した。さらに、より前向きな将来の希望(問5)について、少年院仮退院者群のほうが保護観察処分少年群よりも、有意に高い得点を示した。この結果は、将来への楽観性というよりも、少年院教育の成果と考えることが現実的であるだろう。

以上から、本研究の結果における非行少年群のより高い将来指向性・将来への希望は、彼らの将来への楽観性を表しているとは言えないであろう。

ここで、非行少年は時間的展望の長さが短い傾向にあるとする先行研究と本研究の相違を検討しておきたい。このような先行研究と本研究の結果の違いは、研究方法の相違から生じているとも考えられるのではないだろうか。前述のように、非行少年の時間展望を測るために、大橋・鈴木(1988)は、これからの人生で起こりうる大切な

事柄を挙げさせた。一方、本研究では、「将来」という言葉から想起する年月を、あらかじめ設定された選択肢の中から選ばせている。

大橋・鈴木（1988）が行った調査のように、非行少年が具体的な将来像を自由に表現する場合は、本研究のように「将来」という抽象的な言葉から想起する時間を選択肢の中から選ぶ場合とは異なる結果となりえよう。なぜならば、本研究は、非行少年群は将来指向性・希望はより高いが、将来目標・計画がより低いことを明らかにしており、その結果を踏まえると、非行少年の場合、具体的な将来像を問われたときに、表現する事柄がより限定される可能性があると考えられるからである。

#### **(4) 中学校時代にいい先生だと思っていた教員からの指導に対する、非行少年群の受けとめ方について**

中学校時代にいい先生だと思っていた教員からの指導に関する、質問紙2の問7から問12の各項目への調査対象者全員の回答に関する分析から、問7（「その先生に『がんばれ』と言われたとき、先生は『がんばれば、いつかは、あなたによいことがある』と考えていたと思いますか。」）と問8（「その先生になにかをガマンするようと言われたとき、先生は『ガマンすれば、いつかは、あなたによいことがある』と考えていたと思いますか。」）では、回答結果に有意差が認められ、問7のほうが高かった。また、非行少年群と一般学生群の比較分析から、問8において、非行少年群の得点のほうが、一般学生群よりも有意に高かった。

以上の結果から、まず、いい先生だと思っていた中学校の教員による指導について、調査対象者は、「がんばれ」というような自分の努力をサポートする関わりを受けたときのほうが、自分の欲求を我慢し抑える方向への指導よりも、自分の将来に向けてのものだとしてとらえていることが示された

と言えるだろう。

同時に、本研究は、自分の欲求を我慢し抑える方向の指導について、非行少年群のほうが、より自分の将来に向けた指導だと考えていることが明らかとなった。また、「がんばれ」といった自分の努力をサポートするような指導については、非行少年群と一般学生群での有意差は出ていないが、両群とも、平均点が4点前後と比較的高い。つまり、非行少年群は、中学校時代にいい先生だと思っていた教員からの関わりについて、一般学生群よりも、自分の欲求を我慢し抑える方向の指導に関して、自分の努力をサポートするような指導と同様に、当該教員が自分の将来に向けて行っていたととらえていることが示されている。3.4.1において問2と問3の群間比較から考察したように、非行少年群のほうが、現在の自分の努力や我慢が将来につながりうると考えているのと同様に、中学校時代にいい先生だと思っていた教員からの努力や我慢を促す指導についても、将来に向けたものと認識していると言えるのかもしれない。

さらに、中学校時代にいい先生だと思っていた教員から指導を受けたときの調査対象者全員の気持ちについて、問9（「がんばれ」）、問10（「ガマンしなさい」）、問11（「人に迷惑をかけないようにしなさい」）、問12（「あなたのためだから」）に対する回答結果を比較した結果、有意差が認められ、多重比較の結果、問9のほうが問10よりも、問9のほうが問11よりも、問9のほうが問12よりも、問10のほうが問11よりも、問10のほうが問12よりも有意に高く、つまり、肯定的な気持ちになることが明らかとなった。

以上をまとめるなら、「がんばれ」というような自分の努力をサポートするような指導のほうが、「ガマンしなさい」や「人に迷惑をかけないようにしなさい」というような、行動を抑制していく方向への指導よりも、また、「あなたのためだから」

といった、やや多義的に受けとりうる指導よりも、肯定的に受けとめられることが示されたと言えよう。

### 3.4.2 少年の保護観察対象者への処遇のあり方について

#### (1) 少年の保護観察対象者の将来認知の特徴を踏まえること

本研究の結果、保護観察に付された少年は、将来指向や希望がより高いが、将来目標・計画がより低いという特徴があることが明らかとなった点は注目に値する。

なぜならば、前述のように、非行少年は困難に負けずに目標に向かって努力することができにくいとされ、その背景要因として、将来認知の問題が仮定され、多くの先行研究では、少年の将来展望の短さ、未来志向・楽観的な見通しなどが示されてきたからである。

このような多くの先行研究の結果が示すように、保護観察に限らず、非行臨床の専門家が、一般に非行少年が短絡的で、楽観的であるととらえ、処遇を行っている可能性は否定できないのではないだろうか。しかしながら、本研究の結果はこうした先行研究とは異なっている。まず、本研究では、Shirai (2000) と同様に、非行少年群の将来指向性・希望がより高いことが示された。さらに、3.4.1 で論じたように、本研究における将来指向性・希望は、非行少年の楽観性を示すものとは考えにくい。加えて、本研究では、非行少年群のほうが将来目標・計画がより低く、高い将来指向や希望との間にギャップがあることが明らかとなった。

以上から、保護観察の処遇者である保護観察官と保護司は、少年の処遇にあたって、まず、将来指向性や希望と、将来目標・計画とを弁別することが重要だと言える。

そのうえで、保護観察の処遇者は、少年の保護

観察対象者が将来のことをあまり考えていないのではないか、その将来認知が楽観的であるのではないかというような予断を持たずに接することが必要であろう。同時に、保護観察の処遇者は、非行少年の将来目標や計画の具体性に注目することが肝要であると考えられる。そして、保護観察においては、非行少年が具体的な目標を立て、その実現に向けて実際に進むことができるような自立支援が重要だと言えるだろう。そのために、保護観察の処遇者に、まず求められることは、少年の将来目標や計画を丁寧に聴取していくことや、将来目標や計画について共に考えていこうとする姿勢であろう。

#### (2) 努力や我慢などに対する少年の保護観察対象者の認知の特徴を踏まえること

本研究では、非行少年群は、現在の努力や我慢が将来につながりうると認識している傾向が示された。

したがって、保護観察の処遇者は、保護観察処分少年と少年院仮退院者が、保護観察の初回面接時点において、今後の努力や我慢によって将来が変わりうるという思いを有している可能性を念頭に置くことが必要であろう。そして、保護観察の処遇者が、非行少年がそのように考えているかもしれないと認識することは、非行少年の更生可能性に対する処遇者自身の希望を支えるものとなる。

このような、処遇者が有する、非行少年の改善更生への希望は、保護観察処遇上、極めて重要である。そもそも、希望のないところでは、人への援助的関与は成り立ちえないからである(羽間, 2009)。さらに、Maruna, Lebel, Naples & Mitchell (2009) は、犯罪をした人の改善更生は、その人と他者との相互作用によって生じると論じており、そのなかで、周囲の人からあまり期待をかけられない人は低調な経過をたどり、大きな期待をかけられた人はよい経過をたどると指摘している。

### (3) 大人からの指導に対する少年の保護観察対象者の認知や感情の特徴を踏まえること

本研究の結果、非行少年群は、一般学生群と同様に、中学校時代にいい先生だと思っていた教員からの努力を促す指導を、将来に向けたものにとらえているだけでなく、我慢を求める指導に関しては、一般学生群よりも、将来に向けたものだと認識していることが明らかとなった。また、繰り返しになるが、本研究では、非行少年群は、現在の自分の努力や我慢が将来につながりうると考えている可能性が示されている。

さらに、本研究の結果、一定の信頼関係がある教員から、「がんばれ」、「ガマンしなさい」、「人に迷惑をかけないようにしなさい」、「あなたのためだから」などと指導された場合、「がんばれ」というような自分の努力をサポートするような指導のほうが、行動を抑制していく方向への指導や、意味が多義的に受けとれるメッセージよりも、肯定的に受けとめられることが示された。

以上から、非行少年に対して、その努力や我慢をサポートするような方向の指導をすることは、将来に向けてのものを受けとられやすく、しかも、現在の努力や我慢が将来につながりうるといふ、少年自身の考え方そのものを支える指導となると言えるだろう。そのなかでも、「ガマンしなさい」という言葉で代表されるような、行動を抑制していく方向への指導よりも、「頑張れ」という言葉が代表するような、努力をサポートするような方向の指導が、非行少年から、より肯定的に受けとめられるものとなろう。

ただし、以上の考察は、指導者と指導を受ける人との間に、一定の信頼関係が構築されているもとで成り立つことに注意が必要である。本研究においては、質問紙2で大人からの指導について質問する際に、中学校時代に「いい先生だ」と思っていた教員（思い浮かばないときは、中学校時代

に嫌いではなかった教員）を思い出すよう求めているためである。

つまり、この議論は、処遇者と非行少年の関係性を考慮せずに、単に「がんばれ」といったサポートタイプに聞こえる言葉を繰り返せばよいというものではない。保護観察の処遇者が、より実効性ある処遇のために、まず、少年の保護観察対象者との信頼関係の形成に意を注ぐ必要があることは、言うまでもない。それを前提にして、よりサポートタイプな働きかけをしたほうが、少年に肯定的に受けとめられ、さらなる信頼関係の形成に資すると考えられよう。

## 4 調査2

調査2では、保護観察の処遇者自身の将来認知、処遇者が非行少年の将来認知をどのようにとらえているか、将来に向けた指導に対する考え方などを明らかにするために、処遇者のうち、保護司を対象に（以下、「保護司群」という）、質問紙調査を実施した。

### 4.1 対象

次の3点を満たす保護司を調査の対象とした。

1. A 保護観察所長の保護観察下にある人を担当することとされている保護司。
2. 保護観察処分少年又は少年院仮退院者を担当した経験のある保護司。
3. 本調査の参加にあたって十分な説明を受けた後、十分な理解の上、自由意思による文書同意が得られた保護司。

調査期間中に保護司117名が調査の対象となった。全員からインフォームド・コンセントが得られたため、最終的な調査対象者は、保護司117名（男性75名、女性26名、性別不明16名）となった。年齢は、約半数が60歳台であった。

### 4.2 方法

#### 4.2.1 手続

保護司群については、2013年5月から同年6月までの調査期間中に、A保護観察所が行った保護司に対する定期の研修の機会に、その研修会場において、研修担当の保護観察官が一斉に実施した。

#### 4.2.2 倫理的配慮

前述の通り、調査参加について、保護司本人からインフォームド・コンセントを得た。調査にあたっては、秘匿性確保のため、無記名とし、封筒を調査の対象となった保護司に配布して、保護司本人が記入後の質問紙を封筒に封印したものを回収した。

本調査は、千葉大学教育学部生命倫理審査委員会の承認を受けて実施された。保護司群への質問紙調査の実施については、A保護観察所所長から許可を受けるとともに、調査の対象となった保護司が在籍する保護司会の会長から許可を得た。

#### 4.2.3 質問項目

本研究では、1種類の質問紙を作成・使用した(以下、「保護司への質問紙」という)。

保護司自身の現在と将来のとらえ方についての質問とともに、これまで担当してきた少年の保護観察対象者の将来認知などに関する質問と、保護観察の処遇場面での保護司の考え方や指導法に関する質問項目を作成した。

第一に、保護司自身の将来認知について、5つの質問項目を設けた。

まず、調査1と対応させるため、調査1の質問紙2の問1と同じ質問項目を使用し、「将来」という言葉を使うときに保護司がどれくらい先のことを考えているのかについて、「2～3日先までのこと」「1か月先までのこと」「1年先までのこと」「5年先までのこと」「6年以上先のこと」の5件法の順序尺度で回答を求めた(問1)。

同様に、調査1に対応させるために、調査1の質問紙2の問2と問3と同じ質問を用い、保護司

自身が現在の努力や我慢が将来につながりうると考えているかどうかについて、それぞれ「5:非常にそう思う」から「1:まったくそう思わない」の5件法で回答を求めた(問2と問3)。さらに、調査1の質問紙2の問4と問5と同じ質問を使用し、将来への楽観性や希望に関する保護司自身の認知について、それぞれ、「5:非常にそう思う」から「1:まったくそう思わない」までの5件法で回答を求めた(問4と問5)。

第二に、保護司がこれまで担当してきた少年の保護観察対象者の将来認知や、処遇を通しての変化をどうとらえているかを検討するために、4つの質問項目を作成した。

具体的には、保護司が担当した少年の保護観察対象者が、保護観察開始時点と終了時点において、自分の将来について考えていたと思うかについて、「5:非常にそう思う」から「1:全くそう思わない」までの5件法で回答を求めた(問6と問7)。次に、保護司が担当した少年の保護観察対象者が、同じく保護観察開始時点と終了時点において、自分の将来についてどの程度具体的に考えていたと思うかについて、「5:とても具体的に考えていたと思う」から「1:まったく具体的に考えていなかったと思う」までの5件法で回答を求めた(問8と問9)。

第三に、保護観察における指導場面に関する9つの質問項目を作成した。

まず、保護司が「将来」という言葉を使うときに、少年の保護観察対象者にどれくらい先のことを考えさせたいと思っているかについて、「2～3日先までのこと」「1か月先までのこと」「1年先までのこと」「5年先までのこと」「6年以上先のこと」の5件法の順序尺度で回答を求めた(問10)。

また、保護観察処遇において、保護司が少年の保護観察対象者に対して、努力や我慢をするよう指導するとき、保護司は、少年の我慢や努力が

当該少年の将来につながりうると思っているかについて、「5：非常にそう思う」から「1：まったくそう思わない」までの5件法で回答を求めた（問11と問12）。

さらに、保護司が過去に行った将来に向けての指導について、「将来のことを考えて行動しなさい」と言う指導と、将来のことを具体的に考えていくための指導の2つを想定し、それぞれ、(a) その頻度について「5：かなり多い」から「1：かなり少ない」の5件法で（問13と問16）、(b) 効果について「5：かなり効果的だと思う」から「1：まったく効果的ではないと思う」までの5件法で（問14と問17）、(c) そのように指導されたときの少年の保護観察対象者の気持ちについて「5：とてもよい気持ちになると思う」から「1：とてもいやな気持ちになると思う」までの5件法で（問15と問18）、回答を求めた。

以上の全18項目について、保護観察官等非行臨床の専門家2名と心理学者1名の協力を得て、表現などに問題がないことを確認した。

#### 4.2.4 分析方法

回答結果の比較分析は、調査1と同様に、ノンパラメトリック検定によって行った。

統計解析は、SPSS 21.0Jを使用した。有意水準は5%とした。

### 4.3 結果

まず、保護司群と非行少年群の将来認知を比較するために、両群に実施した問1（「将来」という言葉を使うときにどれくらい先のことを考えているのか）について、Wilcoxonの順位和検定を行ったところ（非行少年群： $n = 75$ 、保護司群： $n = 113$ ）、有意差は認められなかった。

次に、順序尺度である問1と問10を除いた16項目の平均値と標準偏差を算出した（Table 7）。さらに、対応のある各項目間の回答の結果の差を比較するために、Wilcoxonの符号付順位検定を行っ

た。

第一に、保護司自身の将来認知についての検定結果は以下の通りであった。

1. 問2（「先生ご自身は、『がんばったら、いつかは、よいことがある』と思いますか。』）と問3（「先生ご自身は、『何かをガマンしたら、いつかは、よいことがある』と思いますか。』）への回答結果に有意な差が認められ、問2への回答のほうが高かった。（ $z = -5.44, p < .001$ ）。

2. 問4（「先生ご自身は、『楽しいことは、長く続くことがある』と思いますか。』）と問5（「先生ご自身は、『いやなことが続いている、いつかは、いいことが起こる』と思いますか。』）への回答結果に有意な差が認められ、問5の回答のほうが高かった（ $z = -8.05, p < .001$ ）。

第二に、保護司がこれまで担当してきた少年の保護観察対象者については、下記の結果が得られた。

3. 少年の保護観察対象者の多くが、自分の将来のことを考えようとしていたと思うかについて、問6（保護観察開始時）と問7（保護観察終了時）への回答結果に有意な差が認められ、問7の回答のほうが高かった（ $z = -5.37, p < .001$ ）。

4. 少年の保護観察対象者の多くが、自分の将来のことをどれくらい具体的に考えていたと思うかについて、問8（保護観察開始時）と問9（保護観察終了時）への回答結果に有意な差が認められ、問9への回答のほうが高かった（ $z = -6.21, p < .001$ ）。

第三に、保護観察における指導についての質問項目の検定結果は下記の通りであった。

5. 問1（自身が「将来」という言葉を使うときにどれくらい先のことを考えていることが多いか）と問10（保護観察対象者への指導場面で「将来」という言葉を使うとき、その者に、どれくらい先のことを考えさせたいと思っているか）について、

**Table 7**  
**保護司への質問紙の 16 項目（問 1 と問 10 を除く）の平均値 (SD) と中央値 (IQR)**

| 質問項目  | <i>n</i> | <i>M</i><br>( <i>SD</i> ) | <i>Mdn</i><br>( <i>IQR</i> ) |
|---|----------|---------------------------|------------------------------|
| 問 2. 先生ご自身は、「がんばったら、いつかは、よいことがある」と思いますか。  | 116      | 4.25<br>(0.72)            | 4<br>(4-5)                   |
| 問 3. 先生ご自身は、「なにかをガマンしたら、いつかは、よいことがある」と思いますか。  | 115      | 3.80<br>(0.87)            | 4<br>(3-4)                   |
| 問 4. 先生ご自身は、「楽しいことは、長く続くことがある」と思いますか。   | 115      | 2.84<br>(0.91)            | 3<br>(2-3)                   |
| 問 5. 先生ご自身は、「いやなことが続いているけど、いつかは、よいことが起こる」と思いますか。                                    | 117      | 4.17<br>(0.62)            | 4<br>(4-5)                   |
| 問 6. 先生が今まで担当してきた少年の保護観察対象者の多くは、保護観察開始時に、自分の将来のことを考えようとしていたと思いますか。                  | 117      | 3.03<br>(1.01)            | 3<br>(2-4)                   |
| 問 7. 先生が今まで担当してきた少年の保護観察対象者の多くは、保護観察終了時に、自分の将来のことを考えようとしていたと思いますか。                  | 113      | 3.58<br>(0.83)            | 4<br>(3-4)                   |
| 問 8. 先生が今まで担当してきた少年の保護観察対象者の多くは、保護観察開始時に、自分の将来のことをどれくらい具体的に考えていたと思いますか。             | 115      | 2.67<br>(1.01)            | 2<br>(2-4)                   |
| 問 9. 先生が今まで担当してきた少年の保護観察対象者の多くは、保護観察終了時に、自分の将来のことをどれくらい具体的に考えていたと思いますか。             | 112      | 3.46<br>(0.90)            | 4<br>(3-4)                   |
| 問 11. 先生が少年の保護観察対象者に「がんばれ」と指導するとき、先生は「その者ががんばれば、その者に、いつかは、よいことがあるはずだ」と思っていますか。      | 115      | 4.17<br>(0.61)            | 4<br>(4-5)                   |
| 問 12. 先生が、少年の保護観察対象者に何かをガマンするよう指導するとき、先生は「その者がガマンすれば、その者に、いつかは、よいことがあるはずだ」と思っていますか。 | 115      | 4.06<br>(0.61)            | 4<br>(4-4)                   |
| 問 13. 先生は、少年の保護観察対象者に、「将来のことを考えて行動しなさい」と指導することは多いですか。                               | 117      | 3.52<br>(0.96)            | 4<br>(3-4)                   |
| 問 14. 先生は、「将来のことを考えて行動しなさい」と言うことは、少年の保護観察対象者に対し、効果的な指導だと思いますか。                      | 116      | 3.51<br>(0.85)            | 4<br>(3-4)                   |

Table 7 (続き)

## 保護司への質問紙の 16 項目 (問 1 と問 10 を除く) の平均値 (SD) と中央値 (IQR)

| 質問項目  | <i>n</i> | <i>M</i><br>( <i>SD</i> ) | <i>Mdn</i><br>( <i>IQR</i> ) |
|---|----------|---------------------------|------------------------------|
| 問 15. 先生は、少年の保護観察対象者が「将来のことを考えて行動しなさい」と言われると、どのような気持ちになると思いますか。   | 113      | 2.99<br>(0.78)            | 3<br>(2-4)                   |
| 問 16. 先生は、少年の保護観察対象者に、将来のことを具体的に考えていくための指導をすることは多いですか。            | 114      | 3.55<br>(0.74)            | 4<br>(3-4)                   |
| 問 17. 先生は、少年の保護観察対象者に、将来のことを具体的に考えさせていくことは、効果的な指導だと思いますか。         | 116      | 3.92<br>(0.71)            | 4<br>(4-4)                   |
| 問 18. 先生は、少年の保護観察対象者が将来のことを具体的に考えていくための指導を受けると、どのような気持ちになると思いますか。 | 114      | 3.32<br>(0.73)            | 3<br>(3-4)                   |

回答結果に有意な差が見られ、問 10 の回答のほうが高かった ( $z = -3.49, p < .001$ )。

6. 少年の保護観察対象者に努力や我慢をするように指導するとき、努力や我慢をすれば、当該少年に「いつかは、よいことがあるはずだ」と保護司が思っているかについて、問 11 (頑張るよふにという指導) と問 12 (我慢をするよふにという指導) への回答結果に有意な差が認められ、問 11 の回答のほうが高かった ( $z = -2.12, p < .05$ )。

7. 将来を考えるための指導について、問 14 (「将来のことを考えて行動しなさい」という指導) と問 17 (将来のことを具体的に考えさせていく指導) の効果をどのように考えているかについては、回答結果に有意な差が認められ、問 17 への回答のほうが高かった ( $z = -4.70, p < .001$ )。

8. 上記 7 の指導を受けたときの少年の保護観察対象者の気持ちについて、問 15 (「将来のことを考えて行動しなさい」と言われるとき) と問 18 (将来のことを具体的に考えていくための指導を受けるとき) の回答結果に有意な差が認められ、問 18 への回答のほうが高かった。 ( $z = -4.23, p < .001$ )。

9. 同じく上記 7 の指導の頻度については、問

13 (「将来のことを考えて行動しなさい」という指導の多さ) と問 16 (将来のことを具体的に考えていくための指導の多さ) への回答結果に、統計的な有意差は見られなかった。

#### 4.4 考察

##### 4.4.1 「将来」という言葉を使用するときに想起する期間について

「将来」という言葉を使うときにどれくらい先のことを考えているのか (問 1) については、保護司群と非行少年群の回答に有意な差は認められなかった。ただし、保護司自身が「将来」という言葉を使うときにどれくらい先のことを考えているかという質問 (問 1) と、少年の保護観察対象者への指導場面で「将来」という言葉を使うとき、その者に、どれくらい先のことを考えさせたいかという質問 (問 10) への回答の差の分析から、保護司は、少年の保護観察対象者の処遇において、自らが普段想定するよりも、さらに遠い先を考えさせたいと認識していることが示された。したがって、実際の保護観察の処遇場面で、保護司が「将来」と言うときと、少年が「将来」と言う場合では、想起している期間にずれが生じることもある

のかもしれない。

#### 4.4.2 保護司自身の将来認知について

保護司自身の将来認知については、問2と問3の差の分析から、我慢よりも、努力のほうが将来につながりうると考えていることが示された。また、問4と問5の差の分析結果から、楽観的な将来認知よりも、将来への希望のほうが高いことが示された。

この結果は、もちろん保護司個人の将来認知を示しているものである。ただし、本調査が、保護司として、調査への参加を依頼したものであることを踏まえると、現在の努力が将来につながりうると考え、現在、苦労があったとしても将来に希望を有するという認知は、保護司としての職務に向けられたものともとらえられるのではないだろうか。つまり、本研究の結果は、保護観察処遇において、処遇者として努力をすれば、いつかは担当している少年が改善更生していくという希望を、保護司が有していることの現われと理解することもできるのではないかということである。

#### 4.4.3 少年の保護観察対象者の将来認知と処遇に関する保護司の認識

保護司がこれまで担当してきた少年の保護観察対象者の多くが、保護観察開始時に、将来のことを考えようとしていたと思うか（問6）、将来のことを具体的に考えようとしていたと思うかについて（問8）、その回答結果（Table 7）を見ると、問8の回答の平均点が3点を下回っており、保護司は少年が将来を具体的に考えようとする姿勢にやや乏しいととらえていることが示唆される。そして、同じく、少年の保護観察対象者が自分の将来のことを考えようとしていたと思うか、具体的に考えようとしていたと思うかという質問については、それぞれ、保護観察開始時と保護観察終了時に差が認められ、保護観察終了時のほうが高いという結果であった。

以上の結果は、保護司が、これまで担当してきた少年の保護観察対象者が、将来を具体的に考えようとする姿勢にやや乏しいと認識していたことが少なくないこと、そして、保護観察処遇を通して、少年の保護観察対象者の将来認知に肯定的な変化が生じているととらえていることを示していると言えよう。つまり、保護司は、保護観察処遇に一定の効果があると認識していると言えるだろう。

#### 4.4.4 少年の保護観察対象者に対する保護司の処遇について

少年の保護観察対象者への処遇において、保護司は、「将来のことを考えて行動しなさい」と言う指導と、将来のことを具体的に考えていくための指導とを、同じくらいの頻度で行っていることが示された。効果については、将来のことを具体的に考えていくための指導のほうが、「将来のことを考えて行動しなさい」と言う指導よりも、効果的だと考えているとの結果が得られた。さらに、少年の保護観察対象者に、より肯定的に受けとめられているのは、将来のことを具体的に考えていくための指導のほうがとらえていることが明らかとなった。

## 5 総合的考察

調査1の結果から、先行研究とは異なり、少年の保護観察対象者が、将来指向と将来への希望をより有していること、同時に、彼らの将来目標・計画がより乏しく、その間にギャップがあることが明らかとなった。また、少年の将来への希望は、楽観的とはいえ難い、前向きなものと考えられると論じられた。加えて、本研究では、少年の保護観察対象者は、現在の努力や我慢が将来につながりうると認識しており、信頼関係の上でなされる、大人からのサポート的な関わりを、肯定的に受

けとめる傾向があることが示された。

次に、調査2の結果からは、保護司が、保護観察開始時の少年が将来を具体的に考えようとする姿勢にやや乏しいと認識し、将来のことを考えて行動しなさいと言う指導をしたり、将来のことを具体的に考えていくための指導をしたりするなかで、少年の保護観察対象者が、自分の将来を考えようとし、具体的に考えられるようになっていったと感じていることが明らかとなった。

以上から、保護司は、本研究の調査1で明らかとなった、少年の保護観察対象者の将来認知の特徴や、大人からの指導に対する認知や受けとめ方の傾向を、基本的に踏まえていると言うことができるだろう。

すでに、調査1の考察において、保護観察の処遇者は、少年の対象者が、保護観察開始時に、将来指向で、より前向きな将来への希望を有しているものの、将来目標・計画が乏しいという可能性を理解し、両者を弁別する必要があると指摘している。さらに、調査2から得られた、保護司が、将来のことを具体的に考えていく指導のほうが、将来のことを考えて行動するようという指導よりもより効果的であると認識しているという結果とを併せ考えると、少年の保護観察処遇にあたっては、将来のことを具体的に、共に考えていく姿勢や関わりを、より重視していくことが肝要だと考えられる。

まとめると、実際の保護観察処遇においては、保護観察開始時の少年の将来指向の強さを踏まえつつ、将来目標・計画が具体性に乏しいことを意識し、より遠い抽象的な将来について考えるよう促すのではなく、少年の保護観察対象者が将来計画を具体的なものにしていけるように、比較的近い将来の身近な事柄から検討していくほうが望ましいと言えるだろう。

ただし、前述のように、このような関与は、一

定の関係性の上で有効となるものである。そして、少年の保護観察対象者との関係の形成のためには、本研究の調査2の結果が示唆するような、処遇者が持つ保護観察処遇や少年の改善更生に対する希望が、重要な役割を果たすと考えられよう。なぜならば、処遇者が希望を有していなければ、少年が持っているかもしれない将来への前向きな希望を発見することができないからである（羽間，2009）。

つまり、少年の保護観察対象者の希望を冷静に見出そうとする、処遇者の姿勢が、少年との関係形成につながり、その関係が、よりよい自立支援の基盤となると指摘することができよう。

## 6 本研究の限界、意義と今後の課題

本研究はいくつかの限界を有している。

まず、前述のように、調査1の非行少年群と一般学生群では、年齢に有意差が認められた。しかし、年齢の分布の幅が狭かったため、本研究で得られた非行少年群の将来認知の特徴が、年齢による影響を受けているかどうかについての分析ができなかった。

また、本研究は、調査期間中に、女子少年の保護観察対象者について統計解析に足るデータ数が得られなかったため、女子の分析ができなかった。そのため、将来認知の特徴に男女差があるのかなどについては、明らかにできなかった。また、本研究は、成人犯罪者を対象にしておらず、調査1によって示唆された将来認知の特徴が、少年特有のものか否かは不明である。

しかし、本研究では、少年の保護観察対象者を対象に、その将来認知について、(a) 将来指向性や将来への希望の高さと、将来目標・計画の低さのギャップを明らかにしたこと、(b) 少年の保護観察対象者は、現在の努力や我慢が将来につなが

りうると認識しており、その将来への希望の高さは、楽観的なものとは考えにくいと論じたこと、(c) 少年の努力や我慢をサポートするような方向での指導は、努力や我慢などの現在の行動が自分の将来につながりうるという少年の認識を支えること、とりわけポジティブな働きかけが、少年からより肯定的に受けとめられるものとなりうると指摘したことなど、その意義は大きい。また、本研究は、これまで研究がほとんどなされてこなかった保護観察の処遇者である保護司を対象にし、保護司自身が (a) 現在の努力が将来につながりうるととらえ、将来への希望を有していること、(b) 将来を考えて行動するようと言う指導よりも、将来を具体的に考えていくような指導のほうがより効果的で、少年の保護観察対象者に、より肯定的に受けとめられると考えていること、(c) 保護観察処遇を通して、これまで担当してきた少年の保護観察対象者が、将来のことを考えようとし、具体的に考えるようになっているととらえていることを明らかにしたうえで、より効果的な処遇のために、保護司が有する希望の重要性や、具体的な関与のあり方について議論を展開した。

今後は、更に調査の対象を拡げていくことが課題である。具体的には、女子非行少年や成人、特に、再犯対策の必要性が高い若年犯罪者を対象とした研究の実施や、保護観察の処遇者のうち、保護観察官を対象にした研究が必要であろう。

## 文 献

- Frank, L. K. (1939). Time perspective. *Journal of Social Philosophy*, **4**, 293-312.
- 藤岡淳子 (2001). 非行少年の加害と被害 — 非行心理臨床の現場から 誠信書房
- 犯罪対策閣僚会議 (2012). 再犯防止に向けた総合対策 犯罪対策閣僚会議
- 羽間京子 (2009). 少年非行 — 保護観察官の処遇現場から 批評社
- 羽間京子 (2012). 虐待を背景に有する女子非行少年に対する処遇について. *生活指導学研究*, **29**, 159-174.
- 羽間京子・廣部昌弘 (2008). 非行少年の中学校教師に対する認知の特徴を踏まえてかかわりの留意点を探る 国立青少年教育振興機構研究紀要, **4**, 1-12.
- 法務総合研究所 (2001). 児童虐待に関する研究 (第1報告) 法務総合研究所研究部報告, **11**, 法務総合研究所
- 法務総合研究所 (2011). 平成 23 年版犯罪白書 法務総合研究所
- 法務総合研究所 (2012). 平成 24 年版犯罪白書 法務総合研究所
- 石原安希子・谷口五郎・勝木尚子・時田 学・横田正夫 (2003). 非行少年の時間的展望に関する研究 — 異なる測定方法を用いた比較検討 犯罪心理学研究, **40**, 特別号, 18-19.
- 石原安希子・時田 学・渡部 正 (2005). 非行少年の時間的展望に関する研究 — サークル・テストの検討から 犯罪心理学研究, **42**, 特別号, 48-49.
- 小宮山要・星 悦子・高橋和雄・川田三夫 (1976). 非行少年の生活意識に関する研究 科学警察研究所報告 (防犯少年編), **17**, 18-23.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York: Harper Brothers
- Maruna, S., Lebel, T. P., Naples, M., & Mitchell, N. (2009). Looking-glass identity transformation: Pygmalion and Golem in the rehabilitation process. In Veysey, B. M., Christian, J., & Martinez, D. J. (Ed.), *How offenders transform their lives*. Devon: Willan Publishing, pp.30-55.
- 西牧利浩 (2003). 非行少年の時間的展望に関する研究 犯罪心理学研究, **41**, 特別号, 86-87.

- 岡本茂樹 (2013). 反省させると犯罪者になります  
新潮社
- 大橋靖史・鈴木明人 (1988). 非行少年の時間的展望に関する研究 犯罪心理学研究 **26**, 特別号, 4-5.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **165**, 1, 54-60.
- 白井利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学  
勁草書房
- Shirai, T. (2000). Les perspectives temporelles des delinquants: Relier experiences passees et perspectives d'avenir. *Revue Quebecoise de Psychologie*, **21**, 2, 239-253.
- 末永 清・田島秀紀・井部文哉・渡部 正・山口悦照・濱井郁子 (2001). 非行少年の社会認知に関する研究(その1) 中央研究所紀要, **11**, 151-183.
- 杉山 成・神田信彦 (1991). 時間的展望に関する研究 — 非行少年の時間的展望-1- 立教大学心理学科研究年報, **34**, 63-69.
- Teuscher, U., & Mitchell, S. H. (2011). Relation between time perspective and delay discounting: A literature review. *The Psychological Record*, **61**, 613-632.
- 都筑 学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 1, 73-86.
- 都筑 学 (1999). 大学生の時間的展望 — 構造モデルの心理学的検討 中央大学出版部